



混合ワクチンを接種するわんちゃんのオーナー様へ

ワクチンは伝染病予防のための薬です。ワクチンを接種することで、病原体への抵抗性が高まり、感染の予防や、発症しても軽く済むようになります。

ワクチンの接種方法は、**世界小動物獣医師会（WSAVA）**からガイドラインが発表されています。ガイドラインは最新の科学的知見に基づいて、安全にかつ免疫学的に正しいワクチン接種ができるように作成されています。そしてワクチンによるアレルギーなどの副作用が出ないように成犬以上での接種頻度を減らすように推奨しています。

ワクチンの分類

混合ワクチンは予防できる病原体の種類により5種や9種混合ワクチンなどと呼ばれています。混合ワクチンの中には、コアワクチンとノンコアワクチン、非推奨ワクチンがあります。

○コアワクチン：致死性が高く、すべての個体に接種

- 犬ジステンパーウイルス
- 犬アデノウイルス
- 犬パルボウイルス
- 狂犬病

○ノンコアワクチン：致死性が低く、生活環境により頻回接種

- 犬インフルエンザウイルス
- パラインフルエンザウイルス
- レプトスピラ
- ボルデテラ

○非推奨ワクチン：接種は正当化されていない

- 犬コロナウイルス

子犬への接種（コアワクチン）

子犬の時のワクチンは非常に重要で、安心して外を散歩させたり、他の犬と遊んだりするためには必要となります。しかし子犬の時のワクチンは接種のタイミングによっては効かないことがあり、その最大の理由に母親からの移行抗体があります。移行抗体は初乳に含まれており、生まれたばかりの動物を感染症から守ります。

この母親からもらった免疫が持続しているうちは、ワクチンの効果が期待できません。初乳を十分飲めなかった動物では早い段階で移行抗体の効果がなくなり、感染のリスクが上がります。

すべての動物において移行抗体がどれくらいあり、それがいつまで続くのかを調べるのは現実的ではないため、一定の間隔で複数回ワクチンを接種することで移行抗体の持続期間に個体差があっても、免疫が上がるようにプログラムを組みます。1カ月齢という若い月齢でワクチン接種することがありますが、早めに接種したからといってワクチン接種のプログラムが早く終わるわけではありません。

当院では、6～8週齢で初回のコアワクチン接種を行い、16週齢またはそれ以降まで2～4週間間隔で接種を行うことを推奨しています。さらに、確実に免疫を得るため、26～52週齢を目安に再接種を行います。

ワクチンを接種しても効いているとは限らないので、1度は抗体価を測定しても良いかもしれません。今までの抗体検査は、院内で採血を行い、検体を検査センターへ送っていましたが、検査キットによる検査が院内で可能になり、当日に結果がわかるようになりました。

16週齢以降に接種したワクチンの効果があるか、抗体価を調べ、もし抗体価が低ければ早い段階での追加接種が必要になります。

追加接種はいつ？

飼育環境や個々の免疫状態によって接種頻度は変わってきます。

コアワクチンを接種した犬の抗体価（免疫の程度）を調べた論文では、ほとんどの犬で9年間持続していました。このような結果からガイドラインではコアワクチンの接種は3年以上に1回を推奨しています。

※コアワクチンに含まれている狂犬病の予防接種は1年に1回が義務づけられています。

※ノンコアワクチンであるレプトスピラは、毎年接種しないと免疫を維持できないため、必要があればレプトスピラのみ接種します。

成犬では抗体価が十分なら、ワクチンを追加接種する必要はありません。

子犬の頃にきちんとしたワクチンプログラムで接種しても、時間とともに抗体は減っています。しかし、メモリーB細胞というウイルスなどの情報を記憶する細胞が機能していれば、ウイルスの侵入時に速やかに抗体を作ることができます。つまり検査で抗体価が低くてもウイルスの感染は防御できます。

問題は、このメモリーB細胞が機能するかを調べる手段がないということです。

調べられるのは抗体で、抗体が十分なら感染は防御できますが、抗体が不十分な時は、感染は防御できるかもしれないし、できないかもしれない、としか言えません。

ワクチン接種を3年以上に1回にするのは、ワクチンの副作用を減らしたいからです。

しかし、ワクチン接種していない年はワクチン証明書を発行できないため、それらが必要な施設（トリミング、ペットホテル、ドッグラン等）は利用できるか分かりませんので、事前に各施設へ確認してみてください。

抗体価検査のタイミング

抗体価の検査は、免疫が十分あるのかを確認するために行います。以下に検査を実施するタイミングの例を記載します。

- 16週齢以降にワクチン接種したが、ワクチンが効いているのか知りたい
- 長期間ワクチン接種をしていないがペットホテルを利用したい（または入院する必要がある）
- 以前ワクチン接種で具合が悪くなったからワクチン接種できない

日本ではワクチンの接種率が低いため、感染のリスクは常にあるのかもしれませんが。

隣の家の犬がパルボウイルスに感染して、自分の家の犬にも感染して亡くなってしまったという話を聞いたことがあります。

ワクチンで守れる命があります。

遭遇する機会は決して多くないかもしれませんが、感染してからでは遅いです。

どのように接種したらいいかは、獣医師と相談してください。



WSAVAガイドライン

犬のコアワクチンの接種プログラム

(パルボウイルス/ジステンパーウイルス/アデノウイルス2型)

子犬

0週 4週 8週 12週 16週

ワクチン接種



6-8週齢で接種開始

2-4週毎に接種

16週齢以降まで接種

成犬

6カ月または1歳 4歳以上 7歳以上



再接種

3年毎よりも頻回に接種しない

犬のノンコアワクチンの接種プログラム

(レプトスピラ)

子犬

0週 8週

ワクチン接種



8週齢以降に初回接種

2-4週後に再接種

成犬

1歳 2歳 3歳 4歳 5歳 6歳 7歳



1年間隔で投与